

中学校 英語

入門期の書く指導において、自己表現力を高める指導方法の研究  
ードリル活動の取り入れ方の工夫を通してー

弘前市立第四中学校 教諭 工藤 あやめ

## 要 旨

本研究は院内学級の生徒を対象にした「書くこと」の指導において、生徒の自己表現力を高める指導の在り方を探ったものである。ベッドサイド学習という制約の中で、語彙や文構造の基本的事項の定着を目指した継続的なドリル活動を直接指導と間接指導に取り入れて、自己表現活動に結びつける指導を行った。その結果、生徒の書く文の数が増えたり、「書くこと」に意欲的になったりした効果が見られた。

キーワード：中学校 英語 自己表現 ドリル活動 院内学級

## I 主題設定の理由

中学校学習指導要領（平成10年12月告示，平成19年3月一部改正）「第9節 外国語」の「第2 各言語の目標及び内容等」の「1 目標」には「(4) 英語で書くことに慣れ親しみ，初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする」と記されている。このことは，特定の文構造の練習のために，与えられた日本語を英文にするといった和文英訳にとどまらず，自分の考えや意見，感想といったことを既習の語彙や文構造の知識をすべて応用して自己表現することを「書くこと」の目標としていると言える。

「書くこと」による自己表現力を高めるためには，以下の四つのことが必要であると考えた。

第一に，正確な英文を書くために必要な語彙や文構造の知識である。これら基本的事項の確実な定着なくしては，相手に伝えたい内容を正確に表現することができない。

第二に，自分が表現したい内容を日本語の段階でまとめる力である。この力はさらに二つに分けられる。一つは，相手に最も伝えたい内容を，それに関する説明や理由を含めてまとめる力である。二つ目は，既習の基本的事項で表現するために，表現したい内容を損なわないように，必要に応じて日本語を置き換える力である。

第三に，自己表現したことを発表する機会を設けることである。具体的には，書いた内容を基にスピーチすることや，書いた文章を掲示することなどの方法がある。

第四に，発表したことに対して，適切なフィードバックを受けることである。

生徒が自分の書いた文章を発表することで，学習意欲が喚起されることは，多くの研究で明らかにされている。また，生徒は，発表したことに対して，教師や他の生徒からのフィードバックを受けることで，自分の書いた文章を再度見直し，より質的に向上した文章を書くことにつなげていくことができる。

以上の四点のうち，本研究では，基本的事項の定着のための活動と，表現したい内容を日本語でまとめる活動を取り入れて，自己表現に結び付けた授業の在り方を考えていく。

本研究は，院内学級のベッドサイドでの授業を研究対象としている。ベッドサイドの授業の場合，生徒は他の生徒との交流をなかなかもてない。また，授業時間はもとより，生徒の自主学習時間にも後述するような様々な制約がある。そのため教師には，パターン・プラクティスをはじめとする基本的事項の定着を目指したドリル活動を効率よく自己表現活動に結び付けていくことが求められている。

## II 研究のねらい

中学校英語科の入門期の書く指導において，個に応じたドリル活動の取り入れ方を工夫しながら，自己表現活動と関連させて指導することによって，自己表現力が高まることを明らかにする。

### Ⅲ 研究仮説

入門期の書く指導において、「書くこと」に必要な語彙や文構造の知識といった基本的事項の定着と、既習事項を用いて自分の考えや気持ちを英語で表現するドリル活動を工夫することにより、自己表現力を高めることができるであろう。

### Ⅳ 研究の実際とその考察

#### 1 研究における基本的な考え方

##### (1) 自己表現力を高めるための活動

本研究は、院内学級に在籍する生徒を対象にした授業研究である。院内学級の授業では以下のような制約があることを念頭に、教育活動を行っていく必要がある。

- ・学年が様々なため、複式授業である。
- ・教室で授業ができる生徒と、病棟でのベッドサイド学習との二つの授業の場がある。
- ・授業は、教師が直接指導する「直接指導」と、生徒が自主課題に取り組む「間接指導」から構成されている。
- ・ベッドサイドの授業の場合、発音練習や音読練習では、音量などの制約がある。また、携帯できる大きさのホワイトボードが黒板代わりであるため、普通学級のように黒板を広く使って資料を掲示したりすることができない。
- ・入退院による転入・転出が多く、生徒によって、学習の進度や使用教科書の違いがある。
- ・治療の関係で授業が計画的にできないこともある。
- ・次の時間までの課題を出しても、治療などの関係でなかなかできない。
- ・友達や家族から離れ、心の交流などが少ないことからくる不安を生徒は抱えている。
- ・学校へ行けない、思うように勉強ができないことからくる不安を生徒は抱えている。

生徒の実態や院内学級という制約から、自己表現活動のテーマを、自分のことや身近なことに限定した。

自己表現活動は通年の活動と位置付け、教科書TOTAL ENGLISH 1にある‘Action!, Talking’を基に、表1のように毎月のテーマを決めた。

また、生徒が英文を書く前の活動として、日本語で考えをまとめる活動を行うこととした。

具体的には、まず、自分の考えを整理し、表現する文章の要点をまとめる活動として、ワークシートを用いたマッピングの作業を取り入れることとした。

その後、マッピングした図を生かして日本語で表現したい内容をまとめさせた。必要に応じて、同じ内容でより平易な表現に、置き換えさせた。

また、生徒には、自己表現する際の目標となる、テーマに沿った内容のモデル文を提示した。

##### (2) ドリル活動の取り入れ方

先述したように、基本的事項の定着は、英語での自己表現を支える土台となるものである。

院内学級で学ぶ生徒には、間接指導と直接指導という授業形態と、時間の制約がある。したがって、間接指導の時間にも各自で同じ教材を用いたドリル活動を行うことで、直接指導の時間でのドリル活動の効率を上げることを目指した。

ドリル活動の教材として、「基本単語カード」と「基本一覧表」を各自に配付し、継続して使うこととした。

表1 毎月の自己表現活動のテーマ

月	テーマ
4	自己紹介文
5	好きなスポーツ・食べ物
6	My Friend My Teacher
7	In Your Words 私の一週間
8	
9	
10	Activities 友達や周りの人を紹介する対話文
11	My Dream In The Future
12	My Dream In The Future
1	
2	My Town

「基本単語カード」は、教科書の各課で扱う単語などの意味と発音の確認に用いるものである。表には単語などが書かれてあり、裏には意味が書かれているカードである。授業では、単語などの読み方と意味を教師と生徒とのペア活動を通して、正確に読めて意味を覚えるまで口頭練習を繰り返した。

「基本一覧表」は、語句や基本文の意味とつづりの確認をするために利用した。「基本単語カード」と同様、直接指導では、教師と生徒とのペア活動を基本として利用した。「基本一覧表」は、基本文を用いた練習問題形式になっているため、教師は基本的事項がどれだけ定着したかををすぐに把握することができた。

生徒には、間接指導や自主学習の時間にこの二つの教材でドリル活動をするように指導した。病室という制約から、生徒は大きな声で練習することはできない。しかし、これらの時間帯の一人でのドリル活動をしっかり行うことが、直接指導の時間の内容を深めることにつながることを、生徒にも理解させたことで、生徒も熱心に取り組んだ。このことにより、直接指導の時間でのドリル活動を効率化することができた。

また、「基本単語カード」と「基本一覧表」で扱う内容は、新出の範囲はもちろんであるが、既習の範囲を含めて繰り返し扱った。これにより、既習事項を常に振り返ることができ、自己表現に幅をもたせることができると考えた。

### (3) 検証授業について

10月26日に行った授業は、1年生2名のベッドサイドの授業であった。

題材は‘Total English 1 Lesson5 Nice to Meet You, Mihi!’で、Whereで始まる疑問文を扱った。授業の目標を、Whereで始まる疑問文を聞いて、それに対して的確に答えることができることと、S+V (be動詞) + C (名詞) の文型を用いて、友人や家族を紹介する文を作ることができることの二つとした。

図1がモデル文である。生徒が英文を書くに当たっては、This is ~.を用いること、出身を尋ねる文を書くこと、Nice to meet you.を使用することの三つを条件として示した。

さらに、図2のワークシートを用いて紹介文を英語で書かせた。その際、以下の三点に気を付けて書くように指示をした。

1. 英語で紹介の文章を書く前に、日本語で考えをまとめること。
2. 英語に直しにくい時には、書き出した日本語の表現をより平易なものに書き直してから英語に直すこと。
3. 表記上の間違いがないかどうかを見直すこと。

表記上の間違いとしては、本単元で学習している、主語が三人称単数形の場合のbe動詞や、一般動詞の変化、既習の複数形の表記も含むものとした。

これら三点は、「基本単語カード」と「基本一覧表」を用いたドリル活動とつながりを

もち、英文を書いた後でも自分で見直すことができるようになることを目指して指導に当たった。

また、モデル文にとらわれず、発展した内容の文章にも挑戦するように助言した。

この検証授業を終えての反省として、生徒は時間内に紹介文を書き終えることができたが、生徒にモデ

先生がAさんにBさんを、BさんにAくんを紹介している場面です。

Teacher : A, this is B. She / He is your new classmate.  
B, this is A. She / He is your new classmate.

A: I'm A.  
I'm from ( 出身地 ).  
I'm a ( 学校名 ) junior high school student.  
Where are you from ?

B: I'm from ( 出身地 ).  
I'm a ( 学校名 ) junior high school student.  
Nice to meet you.

A: Nice to meet you, too.

Teacher: Let's study together.

図1 モデル文

対話文を作ろう (下書き用) Name \_\_\_\_\_ Date: / ( )

先生にあなたの家族の誰か、または友人を紹介する対話文を作ってみよう。

・紹介する時は This is ~を使おう。  
・出身をたずねる文を入れよう。 where fromを使おう。  
・よろしくお願いします。こちらもよろしくお願いします。を入れよう。  
Nice to meet you. Nice to meet you .too.

先生に ( ) を紹介する対話文

	日本語で	英語に直してみよう
自分		
:		
:		
:		

図2 自己表現ワークシート

ル文を提示したため、それを基に簡単に英文を作ってしまったことが挙げられる。モデル文の提示の仕方や内容を含め、もう少し応用力の求められるワークシートの方が生徒にとっては興味深く取り組めたのではないかと考えられる。

## 2 考察

### (1) 自己表現力の変容

研究の対象が院内学級に在籍する生徒であることから、個々にかかえている事情が大きく異なるため、それぞれの事例に分けて考察を進めていくこととする。なお、10月26日の検証授業では2名を対象としていたが、同じ時期に担当していたもう一人の生徒についても、考察の対象とした。

#### ア 生徒A

検証授業前の自己表現活動では、表1に挙げられたテーマについて、紹介文を日本語にまとめることには比較的慣れていた。しかし最初は、単語の間違いが多かった。

検証授業後は、単語の間違いは以前より減少した。これは、生徒Aが間接指導の時間に「基本単語カード」や「基本一覧表」を使って積極的にドリル活動を行っていた

ことが一因と考えられる。自己表現活動では、マッピングや書くべき内容を事前にまとめるなどの作業を入れたこともあり、より書くことに慣れ、内容的にもまとまりのあるものになってきた。

表2から分かるように生徒Aは、2回の自己表現で英文の数が増え、間違いも減少している。この結果から、語句や基本表現文を繰り返すドリル活動や、自己表現活動を取り入れたことに一定の成果があったことが伺える。

#### イ 生徒B

検証授業前の自己表現活動では、単語の間違が多く、書く文の数は少なかった。

また、表現したい内容の日本語が長いいため、英語に訳しにくい文が多かった。そのため、誤った英文を書いたり、全く書けなかったり、ということが度々あった。検証授業後は、単語の間違いなどは以前に比べ減った。また、一度に書く文の数が増え、内容もまとまりのあるものになった。自己紹介文などの自己表現活動には意欲的になり、和英辞典をよく活用した。また、「基本単語カード」や「基本一覧表」を用いてのドリル活動によって単語を正確に書けるようになった。

この結果から、生徒Aと同様に、ドリル活動による基本的事項の定着が見られたのではないかと考えられる。また、自己表現活動も有用であることが分かる。特に、生徒Bの場合、表現したいことがたくさんあるのだが、すべてを盛り込むには、既習の文法的な知識では対応できないという点で、英文を書く段階で行き詰まる場面があった。しかし、検証授業後は、間違いが減り文の数が増えるなどの効果が見られた。これは、英語で表現しやすい日本語を考え、それを基にしてドリル活動で身に付けた表現を書く体験を積んだことも一つの要因して挙げられるであろう。表3から、生徒Bの書く文の数の増加と間違いの減少が分かる。

#### ウ 生徒C

検証授業前は、単語などの間違いが多く文の数は少なかった。自己表現活動では生徒Bと同様、表現したい内容の日本語が長く、英文に直すことができなかった。

検証授業後は、意欲の面での変化が見られ、よく質問をするようになった。また、自分から自己表現に使う単語などを辞典や

表2 生徒Aの英作文の変化

自己表現の回数	1回目	2回目
英文の数	4	8
三単現の間違い	2	1
複数形の間違い	2	1
単語の間違い	4	1

表3 生徒Bの英作文の変化

自己表現の回数	1回目	2回目	3回目
英文の数	2	7	8
三単現の間違い	2	1	0
複数形の間違い	2	0	0
単語の間違い	3	2	1

表4 生徒Cの英作文の変化

自己表現の回数	1回目	2回目
英文の数	3	7
三単現の間違い	3	1
複数形の間違い	2	0
単語の間違い	3	1

教科書で調べたりするなど、英語に対する前向きな姿勢が見られてきた。表4からは、生徒Cも書く文の数が増加し、間違いが減少したことが分かる。

## (2) 意欲の変容

検証授業後に、紹介文を書く活動についての感想を記入させた。以下は、生徒の感想を集約したものである。

- ・例文を参考にすることで、紹介文を書くことに抵抗感がなかった。
- ・辞典を活用することの面白さを感じた。
- ・書きたいことをまとめた日本語を見直すことで、英文に直しやすくなった。
- ・英語の語順が次第にわかってきた。

これらの感想から、自己表現活動を通して、英文を書くことへの抵抗感が減ってきたことが分かる。特に、日本語を見直すことで英文に直しやすくなったという感想は、マッピングから表現したい内容を日本語でまとめあげるといった一連の流れが、生徒の自己表現には有効であったことを示している。

また、ドリル活動を通して基本的事項の定着が図られたことも、自己表現活動で生徒の書いた文の増加や様々な間違いの減少につながっていると考えられる。その結果、生徒は英語で自己表現をすることに楽しみを感じることができるようになってきたと考えられる。

## V 研究のまとめ

自己表現活動を取り入れることで、生徒には二つの変容が見られた。

一つ目の変容は、自己表現力の向上である。

2回ないし3回の自己表現活動を行った結果、英文の数は全員が増加した。また、単語の間違いや、三単現や複数形の語形変化の間違いについても、全員が減少した。これには次の要因が考えられる。

第一の要因は、自己表現活動の活動の手順を明確化したことである。まず自分が書きたい内容をマッピングにより整理する。その結果を基に日本語で表現してみる。この段階で、英語に直しにくいと思われる文章を、内容を変えないようにしながら、別の言い方で置き換える作業をする。その上で、英文に書き直す、という手順を踏むことが有効であることが分かった。これは、事後の生徒の感想からも伺うことができる。

第二の要因は、ドリル活動による基本的事項の定着を図ったことである。院内学級には、時間や場所の制約がある。そのため、直接指導の授業は効率よく行い、間接指導においては、生徒は「基本単語カード」と「基本一覧表」を用いたドリル活動を行うといった流れができた。これにより、限られた時間内での直接指導が深まったことと、ドリル活動により、自己表現に必要な土台となる基本的事項の定着が図られたということが言える。これは、生徒の書いた文章での様々な間違いが減少したことに表れている。

二つ目の変容は、英文を書くことに対しての意欲の向上である。

これには、日本語で考えをまとめて英文で表現するまでの手順を学んだことが、要因の一つとしてかかわっている。

検証授業は、50分授業の中で、教師が病室を何度か移動しながら2名の生徒をそれぞれベッドサイドで教えるという形態であり、生徒一人に直接指導する時間は20～25分であった。そのため、間接指導における生徒個人によるドリル活動の充実は不可欠である。今回は、ドリル活動の内容が、自己表現活動で用いることができる語彙や文構造や既習事項の復習が含まれるものであり、時間も十分に確保された。そのため、自己表現において、文の数が増えたり、間違いが減ったりといった効果が上がったと考えられる。

## VI 本研究における課題

検証授業後、自己表現活動で書いた文章を、生徒同士でピア・フィードバックする機会を設けた。このフィードバックによって、生徒は書き手を意識することになり、お互いの文章からいろいろな刺激を受けたことから、自己表現活動にとっては非常に有効な方法であると感じた。今後は、ベッドサイドの授業形態ではあるものの、自己表現活動においてピア・フィードバックをいかに有効に取り入れるかを考え、実践していきたい。

本研究では学習段階に従い、自己表現活動の内容に応じたドリル活動の内容と取り入れ方を考えてきた。今回は、基本的事項の音声面でのドリル活動に比重をおいたが、今後は書くことのドリル活動と自己表現とを、いかに結び付けていくかについても考えていく必要がある。

検証授業では、研究対象学年が限られていたこともあり、一定の方法で対応することができたが、今後はあらゆる学年や生徒の学習段階に応じたドリル活動の在り方や教材開発を検討していかなくてはならない。これは、院内学級という特性上、院内学級の教師は、いつ新たな生徒が転入してきても対応しなくてはならず、時間的にも場所的にも限られた条件の中で、常に効果的に対応することが求められているからである。

<引用文献>

文部科学省 1998 『中学校学習指導要領（平成10年12月告示，平成19年3月一部改正）』， p.90

<参考文献>

田村岳充 2009 「「意欲」を高め，発信力を育てる活動の工夫：「マイタウン・プロジェクト」を通して」『英語教育 7月号 第58巻 第4号』 大修館書店